■鼎談

◉ 関西大学を舞台にした映画『今日の空が一番好き、とまだ言えない僕は』4月25日公開

平凡な大学生の苦悩と成長を リアルに描く

ジャルジャル福徳さんの小説が原作
多くの関大生もエキストラで参加

大九 明子 ・映画監督
萩原 利久 ・俳優
芝井 敬司 ・関西大学 理事長

関西大学卒業生で人気お笑いコンビ「ジャルジャル」の福徳秀介さんによる同名の恋愛小説を原作とする映画『今日の空が一番好き、とまだ言えない僕は』が4月25日に公開される。さえない毎日を送る大学生・小西徹が主人公の物語で、千里山キャンパスで撮影が行われた。公開を前に、脚本も手掛けた大九明子監督、主演を務めた萩原利久さんが、芝井敬司理事長と鼎談し、映画に込められた思いなどを語った。

◆千里山キャンパスと周辺地域がロケ地に

――映画の4割近くが千里山キャンパスや周辺地域で撮影されたそうですね。大学や学生のリアルな姿をとらえているところが印象的でした。

芝井　原作が刊行されたときに拝読し、面白い小説だと思いました。恋愛小説仕立てですが、最後にどんでん返しもあるし、途中のプロセスもなかなか面白かった。それが映画でどのように再現されていくのかを楽しみにしていました。

映画を(試写で)鑑賞しましたが、一番のエッセンスともいえるところが特徴的に再現されていると感じました。逆に、原作の中では隠れていてあまり目立っていない部分も、大九監督がシナリオハンティング(脚本を書くための取材)をする中で意味付けをしたり、重みを考えたりしていることがよく分かりました。

大九　すごく丁寧に映画をご覧いただいてとてもうれしいです。おっしゃる通り、小説そのものを再現するというよりは小説を自分の中で消化し、感じた思いを増幅させながら作っていきました。原作を読まれているファンの方がどう思うのかという心配もあったので、小説を読まれた上でそのような感想をいただけるのは本当に励みになります。

――萩原さんは、今回の関西大学での撮影で印象に残っていることはありますか。

萩原　僕は大学生活の経験が無いので、多くの時間をキャンパス内で撮影させてもらったこと自体がすごく新鮮でした。学園ものの映画やドラマの撮影で、特定の教室を使うことは今までにもありましたが、この作品では教室を移動する場面もあったりして、大学生の日常をそのまま切り取ったシーンが多かったのかなと思います。広い大学内をぐるぐると歩き回りながら、実際に学生生活を送っている方がいる中で撮影させてもらったので、曜日によって学生の多さが違うことにも気付きました。時々「自分は関西大学の学生なのでは？」と錯覚するような感じでした。

芝井　人生長いですから、いつかぜひ入学を……。

萩原　もしかしたらもしかするかもしれないですけど(笑)。遠くでにぎやかな学生の声が聞こえてくる環境での撮影も思い出深いですし、撮影中は大学生活のリアルを常にまとえていたのかなと思います。

――エキストラの関大生も多く参加されていたようですね。

大九　映画の企画が動き出してから、どの時期に大学で撮影するかということを検討しました。授業がしっかりある時期がいいのか、それとも春休みや夏休みの期間がいいのか。関西大学さんが全面協力すると言ってくださいましたが、やはり学生ファーストで考えて休みの日に撮影することにしました。

ただ、できれば本物の学生さんたちには、ご自身の思い出作りの一環として楽しんで参加してもらえるよう、エキストラとしての協力をお願いしました。結果的にたくさんの若い人が学生役として参加してくれました。早朝、スタッフが集合場所を案内する看板を持って待っていると、本当に登校風景みたいにエキストラさんたちが集合してくるんです。それがうれしくて一人一人に「ありがとね」と言いたい気持ちになりました。

©2025「今日の空が一番好き、とまだ言えない僕は」製作委員会

◀映画化にあたり文庫本が刊行された。「関西限定版」として、本学での映画シーンを散りばめたデザインのものが関西大学生協などで販売されている

私が大学生だった頃よりも、全国的に大学自体がきれいに整備されていると思いますが、実際に中に入ってみると私の学生時代と変わらない風景もありました。建物の間で演劇部の学生が発声練習をしているのを見たりすると、すごく温かい気持ちになりました。

芝井　昔は大学に顔を出さない学生が結構いましたね。世界を放浪する学生もいれば、アルバイトに注力していて試験の直前に慌てて来るような学生もいました。今は、やんちゃな学生は少なくなったように感じますが、本質から変わっているかというとそうでもない。映画の中で描かれているように、4年間の大学生活というのは若者が苦悩しながらも成長していく時期で、大学とはそういう場所でもあります。

◆友達の多さが価値の高さではない

――萩原さんが演じた大学生・小西と学内唯一の友人・山根との友情が描かれています。

萩原　友達が一人しかいないというと、なんとなくネガティブな印象を持たれてしまうかもしれませんが、そうでもないと僕は感じます。小西は大人数で話すタイプではありませんが、広い大学の中でちゃんと自分が落ち着ける場所というか、マイスポットを持っている。

■鼎談

萩原 利久――はぎわら りく
■俳優。1999年埼玉県生まれ。2008年にデビュー。ドラマ『美しい彼』(2021年)で注目を浴び、以降、映画・ドラマに多数出演。近年の主な出演作に、映画『劇場版美しい彼〜eternal〜』(2023年)、『ミステリと言う勿れ』(2023年)、『朽ちないサクラ』(2024年)、『キングダム大将軍の帰還』(2024年)、『世界征服やめた』(2025年)、ドラマ『月読くんの禁断お夜食』(2023年)、『真夏のシンデレラ』(2023年)、『たとえあなたを忘れても』(2023年)、『めぐる未来』(2024年)、『降り積もれ孤独な死よ』(2024年)、『リラの花咲くけものみち』(2025年)など。2025年には映画『花緑青が明ける日に』の公開を控えている。

映画には人の数だけ見方があると思いますが、まずは純粋に楽しんで見てもらえたらうれしいです。その上で、見終わった後に何かを考えるきっかけになれば、よりうれしいです。

僕はそもそも役に限らず、友達は「量より質」だと思っています。プライベートではいろんなものを共有したり、深い話ができる友達に恵まれています。映画では数こそ「一人」ではありますけど、ちゃんと一人いる。だからこそ、彼(小西)も心の底の部分では孤独とは感じていないはずです。多分、心の温度という意味では、決して冷え切っているわけではない。

大九　今の話を聞いていると、利久くんはやっぱり小西よりずっと大人で、成熟しています。小西は決して孤独ではないんです。ただ、どうしても人と比べたり、人の目ばかり気にしたりしている。その恐怖から逃れられない。

でも、これってほとんどの若者がそうだと思うんですね。「人からどう見られるか」ということがとても恐怖で、それこそが重要だと縛られてしまっている。そういったところから一つ自由になっているのが(河合優実さんが演じた大学生の)桜田花。「私なんか友達一人もいませんけど」っていう人に出会って視点がガラッと変わっていく少年の物語ですが、小西のぜいたくな悩みみたいなところを分かって演じてくれていたことを聞けてうれしいです。

一つだけ絶対に言っておきたいのは、友達が一人もいなくてもいいんです。「友達が多い方が価値が高い」という考え方は一度捨てたほうが良いと思います。特に若者はそこにとらわれすぎて自分を卑下してしまいがちです。でも「友達がいない」ということを悪ととらえないでほしいと思います。

今作に限らず、ずっと私がやっていることというのは、社会で当たり前と思われている価値観を一度疑うことです。小西はとてもつらそうに生きているけど、大人の目から見たら「そんなことないよ」ということを汲み取ってほしいと思って作りました。

――大九監督は「孤独な女性」を描くことで定評があります。今作は主人公が男性でしたが、意識されたことはありますか。

大九　全くないですね。短編では男性主人公のものも撮っていたりしたので。でも、もしかすると私はどの主人公にもちょっと冷たいかもしれないです。例えば今作だと「不幸ぶっているけど、あなたは十分幸せだよ」という気持ちがどこかにあります。

萩原　小西の一つ一つの行動に関して歯がゆさを感じることはありました。そこが映画での面白さでもありますが。

小西と同じ10代から20代前半にかけての時期を振り返ってみると「なんで悩んでいたんだろう」と思えることもたくさんありますし、1年ごとに物事の見え方が違ったように思います。小西に感じる歯がゆさは僕自身も演じながら「こう言うだけで全然違うのに」と思う場面もありました。

◆若者に伝えたい「君は鋭(するど)かれ！」

――映画では関西大学初の女子学生・北村兼子のボイスメッセージが印象的に使われていました。

芝井　北村兼子さんはすごい人です。高等教育を受けることが女性にとって閉ざされていた時代に大学で学び、大阪朝日新聞でジャーナリストとして活動しました。シナリオハンティングで大九監督が北村兼子の資料展示に目を付けたというのはありがたいです。

ただ、前後のコンテキストを含めてどのような意図で監督が(そのシーンを)配置したのか、どう受け止めたら良いのかは自分の課題として残っています。映像の中にはいろんな秘密があって、その全てを受け止めることはできませんが、それに気付くことと、自分の頭でその意味を考えることを同時にすることが鑑賞する側の責務かなと思いながら見ています。

北村 兼子――きたむら かねこ
本学初の女子学生、ジャーナリスト。1903年大阪市生まれ。梅田高等女学校(現大手前高校)を経て、1923年大阪外国語学校(現大阪大学外国語学部)を卒業後、関西大学法学部法律科に聴講生として入学し、1926年に全科目の聴講修了。在学中の1925年に朝日新聞社に入社し、記者の傍ら文筆活動を続けるが、文筆活動に専念するため1927年同社を退社。1928年汎太平洋婦人会議(ホノルル)に日本の政治部委員として参加。1929年万国婦人参政権大会(ベルリン)に日本代表として出席。1931年に27歳で逝去。2025年2月、関西大学から『特別卒業証書』が贈呈された。著書に、『ひげ』『怪貞操』『婦人記者廃業記』『子は宝なりや』『大空に飛ぶ』などがある。

ずっと私がやっていることというのは、社会で当たり前と思われている価値観を一度疑うことです。

大九 明子――おおく あきこ
■映画監督、脚本家。横浜市生まれ。1997年に映画美学校第一期生となり、『恋するマドリ』(2007年)で商業映画監督デビュー。2017年『勝手にふるえてろ』で、第30回東京国際映画祭コンペティション部門・観客賞、第27回日本映画プロフェッショナル大賞・作品賞を受賞。『私をくいとめて』(2020年)が、第33回東京国際映画祭・TOKYOプレミア2020にて史上初2度目の観客賞、第30回日本映画批評家大賞・監督賞を受賞。TVドラマでも、NHK『家族だから愛したんじゃなくて、愛したのが家族だった』(2023年)が、第121回ザテレビジョンドラマアカデミー賞・最優秀監督賞等を受賞。

大九　北村兼子さんが約100年前に言っていたジェンダーギャップの問題はいまだに何も変わっていないんですよね。シナリオハンティングで「いつまで我慢していればいいんだ、もう怒ってもいいだろう」という内容のメッセージを読む兼子さんの声を聞いた時、思わず動けなくなってしまいました。

国際映画祭という場所で映画を見てもらうようになってから10年ほど経ちますが、映画を作っている人間としてこういうものに出合ったら脈絡とかそういうことはさておき「これは絶対に私が残さなきゃダメ」と、作品に盛り込みました。怒りにも似た気持ちで描いたところがある。女性たちに向かって「君は鋭かれ！」と言った北村兼子さんの言葉、性別関係なく現代の若者に私からも言いたいです。

萩原　映画のとらえ方は必ずしも一緒ではなく、一人一人注目するポイントも、引っ掛かる部分も変わってくるはずです。先ほど監督がおっしゃった小西のぜいたくな悩みも、リアルに同じようなことを感じている人は共感するかもしれませんし、「なんじゃそれは」と感じる人がいてもおかしくはない。

映画には人の数だけ見方があると思いますが、まずは純粋に楽しんで見てもらえたらうれしいです。その上で、見終わった後に何かを考えるきっかけになれば、よりうれしいです。

映画の中で描かれているように、4年間の大学生活というのは若者が苦悩しながらも成長していく時期で、大学とはそういう場所でもあります。

芝井 敬司――しばい けいじ
■学校法人関西大学第22代理事長。1956年大阪市生まれ。1978年京都大学文学部史学科(西洋史)卒業。1981年京都大学大学院文学研究科博士課程後期中途退学。1984年関西大学に着任。1994年文学部教授、2002年文学部長、2006年副学長、2016年学長を歴任。2020年より現職。学外の主な役職に、独立行政法人大学改革支援・学位授与機構評議員、公益財団法人私立大学退職金財団評議員、一般社団法人大学スポーツ協会理事など。

■映画紹介

Introduction：映画情報

『今日の空が一番好き、とまだ言えない僕は』

映画『今日の空が一番好き、とまだ言えない僕は』が4月25日から全国で公開されることが決定しました。大阪ではTOHOシネマズなんば、テアトル梅田、109シネマズ大阪エキスポシティ、東京ではTOHOシネマズ日本橋、テアトル新宿、名古屋ではミッドランドスクエアシネマなどの映画館で上映を予定しています。本学卒業生の漫才コンビ「ジャルジャル」の福徳秀介さんの小説を原作に、関西大学千里山キャンパスが舞台となった映画がいよいよ公開されます。

主人公の関大生、小西徹を演じるのはドラマ『美しい彼』（2021年）で注目された萩原利久さん。小西が恋するお団子ヘアの関大生、桜田花を演じたのは、ドラマ『不適切にもほどがある！』や、映画『あんのこと』、『ナミビアの砂漠』など話題作への出演が続く河合優実さん。その他には伊東蒼さん、黒崎煌代さん、古田新太さんらが出演しています。監督は大九明子さんで、脚本も手掛けました。

千里山キャンパスや周辺地域を主なロケ地として2024年4月から撮影が行われ、多くの学生や教職員がエキストラとして出演するなど、大学としても全面的に撮影に協力しました。正門や法文坂、図書館、博物館などのキャンパス風景や、授業の様子がリアルに再現されていて、学生にとっては馴染みのある風景が美しい映像となり、スクリーンに広がります。若者たちの出会いや成長を描いた物語を、ぜひ劇場でご覧ください！

■劇場情報：上映館が続々と決定中！

近畿地区　MOVIX京都／TOHOシネマズなんば／テアトル梅田／MOVIX堺／MOVIX八尾／109シネマズ大阪エキスポシティ／シネ・リーブル神戸

関東地区　TOHOシネマズ日本橋／テアトル新宿／ヒューマントラストシネマ渋谷／シネ・リーブル池袋／kino cinema 立川高島屋 S.C.館／横浜ブルク13／kino cinema 横浜みなとみらい／109シネマズ川崎／小田原コロナシネマワールド

北海道地区　サツゲキ（札幌）／ディノスシネマズ苫小牧

東北地区　フォーラム盛岡／フォーラム仙台／フォーラム山形／フォーラム福島

中部地区　T・ジョイ長岡／福井コロナシネマワールド／長野グランドシネマズ／上田映劇／シネシティ ザート（静岡）／CINEMA e-ra（浜松）／シネマサンシャイン沼津／ミッドランドスクエア シネマ（名古屋）／センチュリーシネマ（名古屋）／安城コロナシネマワールド／ミッドランドシネマ名古屋空港／伊勢進富座本館

中国・四国地区　福山コロナシネマワールド／シネマサンシャイン重信／キネマ ミュージアム（高知）

九州・沖縄地区　T・ジョイ久留米／109シネマズ佐賀／ワンダーアティックシネマ（宮崎）／ミハマ7プレックス（沖縄）…… and more

詳しくは公式ウェブサイトをCheck！▶

©2025「今日の空が一番好き、とまだ言えない僕は」製作委員会

◉第37回東京国際映画祭でも好評

本作品は、2024年10月28日から11月6日まで開催された第37回東京国際映画祭のコンペティション部門に出品されました。

3回の上映チケットは発売初日に完売。人気俳優の好演が話題で、SNSでも映画を評価する声が高まりました。また上映に伴って行われた舞台あいさつでは、俳優陣らが関西大学を中心に行われた撮影について語り、大きな声援と拍手に包まれました。

▲東京国際映画祭での出演者たち
©2025「今日の空が一番好き、とまだ言えない僕は」製作委員会

Movie Scenes

（写真：©2025「今日の空が一番好き、とまだ言えない僕は」製作委員会）

Comment

：キャストの2人からのコメント

●萩原 利久さん

関西大学はめちゃくちゃ良いところでした。こんなに学内で撮影させてもらえることはなかなかなく、ありがたかったです。学生の皆様にどんなふうに観てもらえるのかな、って思いながら、1カ月撮影させていただきました。

●河合 優実さん

すごい広々としたキャンパスで、桜もきれいで、本物の関大生の皆さんの姿を毎日吸収しながら撮影できました。本当に良い学びの場だな、とクランクインしてすぐ思いました。ここで勉強すること、4年間過ごすこと、その時間はすごく貴重だ、とキラキラしている関大生の皆さんを見ながら思っていました。

◉「今日空×関西大学 ロケ地マップ」を作成

▲関西大学学術研究会マス・コミュニケーション学研究部の学生たち

学術研究会マス・コミュニケーション学研究部の有志学生が中心となり、『今日空×関西大学 ロケ地マップ』を作成しました。試写を見た学生たちは、原作やエキストラ出演した学生の声なども参考にして、自分たちが紹介したいロケ地をピックアップしました。イラストやコメントを入れるなどの工夫を凝らし、さまざまなロケ地や映画の場面について紹介しています。

千里山キャンパスの正門、博物館、総合図書館、凜風館、第1学舎など学内のロケ地のほか、関大前商店会の店舗にも協力いただき、ケープコッド、フォージュロン、といった飲食店、フタバボウル（ボウリング場）なども取り上げました。

ロケ地マップは学内各所で配布中。学内イベントや映画館などでも配布する予定です。

マップ制作にかかわった学生たちは「理想的な『聖地巡礼』ルートもマップ上で示しました。映画に出てくるキャンパスの風景などを楽しんでほしいという思いで作成したので、ぜひロケ地マップを手に取っていただき、映画の世界と関西大学の魅力を体感しに来てください！」とコメントしました。

▲今日空×関西大学 ロケ地マップ

◉文学部学術講演会に大九監督が登壇

12月3日に開催された文学部学術講演会に大九監督が登壇しました。堀潤之教授が聞き手となり、学生と一般参加者を合わせた約170人の聴講者を前に映画撮影について語りました。

千里山キャンパス内での撮影に関しては、「大学の全面協力がとてもうれしく、『全部本物』で撮ることができました」と話し、原作で約5ページに及んでいる長台詞のシーンについては、「この作品の特徴の一つとなっているシーンなので、わくわくする気持ちでカメラを2台用意して撮影に挑みました」と振り返りました。

また映画業界の働き方改革に関する質問に対しては、「日々のスケジュールを作成してそれに基づいて進めるなど、少しずつ改善してきました」などと説明。また、英語タイトルが原題と違う理由についての問い掛けには「良い質問ですね！」と反応し、本作品では「セレンディピティ」という言葉がキーワードになっていることについて丁寧に解説しました。

講演会終了後には大阪市内の映画館で関係者向けの試写会が行われ、撮影に協力した学生や映画研究会の部員らが参加。映画のラストシーンの作り方や音響効果の使い方などについて大九監督へ質問しました。学生らが監督を囲んで記念撮影する場面もあり、和やかな雰囲気の中で幕を閉じました。